

二松学舎大学人文学会 第一二五回大会 要旨

二松学舎大学人文学会第 125 回大会

◆日 時 2022 年 12 月 3 日 (土) 12:50～ (開場 12:30)

◆開催方式 対面+YouTube 配信

◆会 場 対面：二松学舎大学 九段キャンパス 3号館 4階 3041 教室

オンライン：二松学舎人文学会 YouTube チャンネル

◆備 考 事前申し込み不要・参加費無料

12:50 開会挨拶

13:00～15:10 研究発表 (各 30 分(発表 20 分、質疑応答 10 分))

痛みを映しあう／「僕たち」が語ること—川上未映子「ヘヴン」論—

二松学舎大学大学院文学研究科国文学専攻 博士前期課程 2 年 初芝 里帆

五行と災異—『漢書』五行志を中心に

二松学舎大学大学院文学研究科中国学専攻 博士後期課程 3 年 陳 鵬飛

「早春図」の空間表現から見る山水受容の一側面

二松学舎大学大学院文学研究科中国学専攻 博士前期課程 2 年 加藤 淳

『燕塵』の編集長 杉野耕三郎

二松学舎大学大学院文学研究科中国学専攻 博士後期課程 3 年 張 付梅

15:10～15:30 休 憩

15:30～16:50 講 演

観光とメディアのリミックス—情動を形成する観光＝メディアの精神分析

立命館大学文学部教授 遠藤 英樹

16:50 閉会挨拶

【第二二五回大会 講演】

観光とメディアのリミックス——情動を形成する観光IIメディアの精神分析

立命館大学文学部 教授

遠藤 英樹 氏

◆講師プロフィール

現在、立命館大学文学部教授。

専門は観光社会学、社会学理論、現代文化論。

関西学院大学社会学部卒業、同大学院社会学研究科後期博士課程社会学専攻単位取得退学。社会学修士。
編著書に、

『現代文化論』（ミネルヴァ書房、二〇二一年）

『ツーリズム・モビリティーズ』（ミネルヴァ書房、二〇一七年）

『観光社会学 20』（共著、福村出版、二〇一八年）、

『ワードマップ 現代観光学』（編著、新曜社、二〇一九年）

『Understanding tourism mobilities in Japan』（編著、Routledge、二〇二〇年）

『ポップカルチャーで学ぶ社会学入門』（ミネルヴァ書房、二〇二一年）、

『アフターコロナの観光学』（編著、新曜社、二〇二一年）

『よくわかる 観光コミュニケーション論』（編著、ミネルヴァ書房、二〇二二年）

『フィールドワークの現代思想』（編著、ナカニシヤ出版、二〇二二年）
など多数。

【研究発表要旨】

痛みを映しあう／「僕たち」が語ること

——川上未映子「ヘヴン」論——

文学研究科国文学専攻 博士前期課程二年 初芝 里帆

本作は、斜視を理由に苛めを受ける中学二年生の「僕」がクラスメイトの「コジマ」との交流を通じ、「なぜ自分たちは苛められるのか」ということを考える物語である。

本発表ではコジマが提唱した「しるし」に注目し、痛み of 身体感覚を考察したい。コジマは自身の汚れや拒食、「僕」の斜視を「しるし」と形容している。コジマは最後まで「しるし」を捨てなかったのに対し、「僕」は斜視の矯正手術を行うことで「しるし」を失う。コジマが「しるし」を最後まで抱えることで守ろうとしたものは何か。「僕」が「しるし」を失くしたことで乗り越え、獲得したものは何か明らかにしたい。

現時点においては「しるし」は自己の存在証明でありながら、コジマが父親や「僕」と心を一つに「繋がる」側面と、苛めの標的としてクラスメイトから「排除される」側面を併せ持った両義的なものであることが分かった。

今後の課題は、本作の最終場面で強調される「美しき」と身体感覚がどのように接続するか、また本作における雨の場面と「乳と卵」の玉子割の場面の関係性について考察することである。

五行と災異——『漢書』五行志を中心に

文学研究科中国学専攻 博士後期課程三年 陳 鵬飛

前漢において、董仲舒・劉向・劉歆らは、天人相関の思想に基づき、陰陽五行の理論によって災異を解釈し、災異説の体系を構築したとされる。しかし、天人相関と陰陽と五行とは別のものである。今回の発表は、五行の理論に注目しながら、『漢書』五行志を対象として、そこに記述される五行と災異の記事を整理・分析し、五行思想が災異説でどのように応用されてきたのかを明らかにしたい。

「五行」という語は、『書経』の甘誓篇にはじめて現れており、洪範篇に「水火木金土」を指していることが明記される。初期の「五行」は、万物構成の五元素として、相生・相剋などの関係があるため、天地の変化の法則と見なされた。戦国末期、鄒衍は陰陽と五行を結び合わせて、王朝交代の原則とする「五徳終始説」を主張し、五行を政治に適用した。漢代に至って、『洪範五行伝』では、洪範九疇（五行・五事・八政・五紀・皇極・三徳・稽疑・庶徴・五福六極）を用いて政治と災異とを関連づけた。劉向と劉歆は『洪範五行伝』の説を継承して、災異を五行思想によって分類・解釈し、災異説の体系化を推進した。『漢書』五行志には、劉向・劉歆の災異解釈を多く収録し、この流れの延長として考えられる。

「早春図」の空間表現から見る山水受容の一側面

文学研究科中国学専攻博士前期課程二年 加藤 淳

北宋期に活躍した郭熙（一〇二三―一〇八五）は、神宗に取り立てられて以来、有力な画工として活躍したと言われている。伝承作品は少ないが、台北故宫博物院所蔵の「早春図」は郭熙の代表作であるのみならず、北方山水の粹である。また、郭熙の言葉を収めた『林泉高致』という著作も残っている。これは郭熙の子の郭思が父の言葉をまとめたものであるが、この文章を通して、我々は郭熙の画に対する考えを知ることができる。

『林泉高致』の記述の中で、有名かつ難解なもののひとつがいわゆる「三遠」と呼ばれる件である。ここでは「平遠」「深遠」「高遠」という見方が提示される。中でも「深遠」に関しては複数の解釈が提示されている。そこで本発表では、「深遠」を巡る複数の議論を足掛かりに、郭熙が山水をどう見ていたのかを、絵画と画論の両面から探ってみたい。その際手がかりとするのが、郭熙が用いる「意」という言葉である。郭熙は山水に対しても「意」という言葉を用いている節があり、それが鑑賞者と絵画空間をつなぐ経路となっていると思われる。このような山水観に基づき、受容の側面から絵画空間を把握することで、「深遠」の理解にひとつの見解を提案する。

『燕塵』の編集長 杉野耕三郎

文学研究科中国学専攻 博士後期課程三年 張 付梅

『燕塵』は一九〇八年一月二十日、北京の燕塵會から創刊された日本語雑誌である。創刊の一ヶ月前、当時の日本公使林権助氏や阿部守太郎氏をはじめとする公使館関係者によって、その母胎として北京に「燕塵會」が設立され、同人雑誌『燕塵』を発行することとなった。同紙は編集長杉野耕三郎（一八六九年一月三十一日〜？）の手によって日本外務省（駐華公使館）の管轄下となり、日本政府の対中政策と密接な関わりを持つようになった。

杉野耕三郎は、一九〇五年東京帝国大学法学部卒業、通信事務官、北京郵便局長、東京庁通信局長などを務め、一九二八年に日本統治時代の大連市市長を務めた。

本稿は、『燕塵』編集長に関する考察を通じて、その創刊にいたる歴史と編集方針、雑誌誌面の変遷と記事の傾向性及び在華日本人の活動を明らかにしようとするものである。また、編集長就任の経緯、ロバートハートとの交際に関する記事について説明を試みる。同誌に掲載された「北京日本人會の近況」「初めて歐州人の眼に映じたる清國の驛傳」「サー、ロバート、ハート」「大清郵政の發達」など数編は杉野の執筆に係るが、これらの文章を通じて、杉野の中国認識について考察をする。